

柳宗悦と式場隆三郎

——戦前・戦中における民藝運動の一断面——

Sōetsu Yanagi and Ryūzaburō Shikiba: An aspect of the Mingei Movement before and during World War II

成瀬 翔 鷓子 修司
NARUSE Sho UKO Shuji

はじめに

柳宗悦（1889-1961）は、民藝における「用の美」「生活の中の美」を説いた思想家である。その思想は日本民藝協会の機関誌『民藝』をはじめとした出版物や、主として日本民藝館の展示企画を通じて広められ、柳の生前から現代に至るまで、日本の文化世界に影響を及ぼし続けている。2021年には、柳の没後60周年を記念した「民藝の100年」展が東京国立近代美術館で開催された。以上のことから、柳の主導によって展開された民藝運動の歴史が、近代日本の文化における重要な一側面をなしていることは疑い得ない。

民藝運動が命脈を保ち得たひとつの理由は、戦時中の思想統制という困難にも屈しなかったことが挙げられるだろう。しかし、戦前・戦中の文化運動が軍国主義と体制への協力という近代日本史の負の側面と切り離せないように、民藝運動もまた時局の影響を免れ得なかった。また、柳の民藝という思想にも「伝統」や「民族」といったナショナリズム的に解釈される要素が含まれているのも事実である。だが、後の言論において小熊英二や長田謙一、菊池裕子などによって提起された民藝運動と戦争との関係という論点は、民藝協会の関係者を巻き込んだ大規模な論争に発展することはなかった¹。現在においても、前述の「民藝の100年」展では民藝と戦争との関係は僅かに言及されるにすぎない事実が示す通り、日本民藝協会側はその歴史を極めてデリケートな問題として扱っていると言わざるを得ない。

戦前・戦中における民藝運動の戦争協力について議論が深まらない理由には、その議論が運動の中心人物である柳の思想をいかに解釈するかという対立に回収されてしまうことが挙げられる。簡単に言えば、擁護者は柳が人道的な反戦・非戦論者であることを根拠にして、民藝運動の戦争協力を否定する。一方で、批判者は柳が沖縄やアジア諸国に向けたオリエンタリズム的なまごしから、彼が侵略を肯定した帝国主義者であったと論じる。それを根拠に民藝運動の戦争協力を帰納するのである。

前者は、柳が公刊した文献のみならず、日本民藝協会が所蔵する書簡や日記、著作物への書き込みなどの未公刊資料に基づいた文献学的解釈を提示する。これに対して、後者はポ

ストコロニアリズム批評の立場から柳の沖縄や朝鮮などに対する言説のイデオロギー分析を提示する。だが、両陣営とも別の観点からの批判と擁護を展開しているものであり、つまるところはほとんど議論がかみ合う様子はみられない。そして、なによりも問題なのは、柳自身の思想と民藝運動の活動が分かち難く一体化され、柳への評価が民藝運動への評価へと投影されている議論の混乱ないし誘導に他ならない。

これに対して、キム・ブランドは、民藝運動と帝国主義の関係性を詳細に分析し、多くの示唆を与える²。彼女による研究は、当初は知的エリートたちの「趣味」から始まった民藝運動が、1930年代以降に「社会改革運動」へと移行した理由を解明するために、民藝運動内の権力構造の変化を論じる。だが、ブランドは1930年代初頭の鳥取における「新民藝」運動を主導し、戦時中は北支の民藝運動を主導した吉田璋也に着目し、その思想と実践について描き出す一方で、彼と深くつながり、満州における民藝運動を主導したとされる式場隆三郎の影響性については部分的に言及するにすぎない³。

このように、式場という存在は従来の研究では式場の民藝運動に対する関与は主観的に論じられることなく、関係者の一員として言及されるにとどまってきた。だが、式場はその生前においては、精神医学、ゴッホなど美術研究、山下清のプロデュースなど多面的な活動によって広く知られていた文化人であり、戦前・戦中は民藝運動の主導的メンバーの一人であった⁴。しかし、現代において式場という存在は、彼が芸術家として評価し、世に送り出した画家・山下清との交流やアウトサイダー・アートの文脈⁵において言及される以外はほとんど忘却されてしまったといっても過言ではないだろう⁶。だが、ジャーナリズムに対する影響力を持っていた式場は、戦前・戦中の民藝運動において機関誌『月刊 民藝』の編集や民藝関連の著作物の出版活動を通じて広報的役割を一手に担うことになる。そして、民藝運動は式場の影響力を活用し、満州への影響をもくろむ軍部や産業界、公官庁を巻き込んだ巨大なプロジェクトへと展開することになる。

これに対し、本稿では、月刊誌『民藝』の編集を通じた式場のコミットメントが、民藝協会および民藝運動の方向性に少なからぬ影響を与えたという歴史的事実に光を当てる。そして、その式場の民藝に対する態度の背後には、柳に対する尊敬と崇拝と承認欲求が混ざり合った複雑な感情が含まれて

いた可能性を示唆したい。

1. 柳宗悦と式場隆三郎との交流

以下では最初期の式場隆三郎と柳宗悦の交流を、(1)『白樺』への傾倒を示す時代(1898年～1923年)、(2)木喰五行上人の共同研究を行う時代(1924年～1925年)、(3)精神医学研究に専念する時代(1925年～1929年)、(4)ゴッホ研究とジャーナリズムのデビューの時代(1930年～1934年)に分けて確認しておこう⁷。

1.1 初期の式場隆三郎と柳宗悦との接近——『白樺』への傾倒(1898年～1923年)

式場隆三郎は、1898年(明治31年)7月に新潟県中蒲原郡五泉町(現・五泉市)に生まれる。1889年(明治22年)生まれの柳宗悦とは10歳違いであるが、以後の両者の関係を鑑みるならば、その年齢差は友と呼ぶには離れすぎていた一方で、師として崇拜するには近すぎていたかもしれない。

1917年(大正6年)、式場は新潟医学専門学校(現・新潟大学医学部)に入学する⁸。このころより、式場は雑誌『白樺』を愛読しはじめ、西洋文学に傾倒するにいたる。1919年(大正8年)には、新潟医専の同級生であり、民藝運動における盟友吉田璋也たちと文化団体「アダム社」を結成し、同年11月には雑誌『アダム』を編集刊行する⁹。アダム社は武者小路実篤の「新しき村」運動への参加・新潟支部の設立など白樺派への傾倒を顕著に示していた。式場や吉田を中心とするアダム社は精力的に活動し、設立年においても9月に武者小路実篤の講演会、柳兼子独唱会を主宰する。これを機に柳との知遇を得た式場は、安孫子の柳宅を初訪問することになった。

白樺派に傾倒していた式場は、「東京で「白樺複製展」をみて、ブレイクとゴッホに驚嘆して柳さんが世話していられた、英国のホリヤーの複製を申し込んだのが個人的交際のはじめだった」と述べている¹⁰。とりわけ、式場はとりわけブレイクの詩と絵画に心惹かれていたという。式場が1943年(昭和18年)に出版した『宿命の藝術』(昭和書房)では、ウィリアム・ブレイクの『ユリゼンの書(The Book of Urizen)』より第2頁の複製画が掲げられている(図1)¹¹。その意図を式場は次のように述べている。

日本におけるブレイクカルトについては、壽岳文章兄の名著『キルヤム・ブレイク書誌』に詳記されてゐるが、柳宗悦先生が雑誌『白樺』で紹介され、その後大著『キルヤム・ブレイク』が刊行され、『ブレイクの言葉』が出た。ブレイクの複製展覧会は柳先生によつて度々開かれた。私と柳先生の結縁もブレイクであつた。(338頁)

そして、ブレイクの複製画を挿絵に掲げた理由として「若かりし頃の私の芸術的熱情への回顧としてもここに収めたかつた」と述べている(339頁)

ブレイクが柳をはじめとする白樺派に与えた影響については、佐藤光による圧倒的な研究¹²が存在するためここでは繰り返さないが、式場の出発点が柳のブレイクの「複製」にあるということは強調に値するだろう(図2)¹³。



図1:『宿命の藝術』6頁挿絵

図2:ブレイク『ユリゼンの書』2頁(部分)

木下長宏のゴッホ研究の副題に「複製受容」という語が含まれるように、白樺派にとっての美術および思想はまずウィリアム・ブレイクやポスト印象派などの「複製」、さらには「翻訳」にあった¹⁴。そして、その「複製」を通じて、式場は自らの思想を形成し、さらに「複製」を行っていくことになる。この「複製」「再複製」の果てしないプロセスをブランドは、エリートたちを模倣する振興中間層という社会階層性から論じる¹⁵。すなわち、「白樺」を読む式場は学習院のエリートに憧れを抱く地方の文学青年の一人にすぎなかった。とはいえ、式場(さらには同級の吉田璋也)が医師という日本社会においては「尊敬」の対象となる新しいエリート層に属し、民藝運動の中心となったことは、エリートの「複製」思想を再「複製」思想として反復し、社会へと還元していこうとする明治以来の「複製」「翻訳」文化の根源的問題の典型例であろう¹⁶。

1.2 木喰研究における共同作業（1924年～1925年）

柳と式場との緊密な関係は、翌1924年（大正13年）から始まる木喰五行上人の研究に現れている。式場は、研究会の事務局長として研究誌の編集や著作の刊行などを一手に引き受けただけでなく、膨大な調査資料や書誌情報の記録整理など担っていた¹⁷。式場の『宿命の藝術』には、木喰研究に関する2編のエッセイが収録されている。前者の「木喰仏世に出づるまで」は柳を中心とした木喰仏の発見と調査のドキュメンタリーとして貴重であるが、ここでは式場自身が木喰研究を振り返った後者の「木喰上人の民藝仏」を参照してみよう。

あの侘しい年が来て十三年の正月、柳先生を訪ねると甲府へ行つて木喰上人の仏像をみて感心したと話してあられた。（中略）それから木喰研究に着手されて、研究会ができ私も参加したのであつた。（中略）あの目覚ましい柳先生の活動振りは、私の生涯に最も大きな影響を興へた。調査の旅へ私もついて行つたことが度々ある。私だけ調べに行つたこともある。

この木喰研究は、柳先生の生涯に大きな転機をつくつた。そして民藝運動は、この中から生まれたのである。いま木喰研究誌を精読する人は、その中に民藝論の前駆をなす思考の数々を発見するであらう。（322頁）

木喰研究に参加していた当時の式場が、後に展開される柳の民藝論を知る由もない。だが、式場は柳がこれまで顧みられることのなかった木喰五行上人の「健康性」を強調し¹⁸、その手によって生み出された仏像に「工藝本来の姿」を見出す現場に立ち会わせたことを強調する。『宿命の藝術』が刊行された時期の式場が民藝協会の中心人物として運動に関与していたことを念頭に置くならば、上記の引用からは、民藝の揺籃期から柳に付き添ってきたという彼の自負が伺えるだろう。

しかし、木喰研究を終えたから1925年を境として、柳の民藝運動とは一時的に距離を引くことになる。この事情を前述の「木喰上人の民藝仏」では次のように述べられている。

京都へ移住される頃の柳先生の心境は、静かに読書に没頭したいやうだつた。「レギュラーにもう一度勉強し直すよ」と私に語つてあられた言葉を今も忘れずにいる。震災で荒れた東京は、人の心をも荒ませた。どこの家庭だつて暗い影がさしてゐた。私は柳先生の心にも、

何か暗いものをみた。私自身も同様だつた。もう東京で医業をつづける気はしなかつた。私は柳先生にすすめられて、一緒に京都へゆき新しい生活へ入らうと決心して家までみつけて貰つた。

この計画は父の反対で実現しなかつた。しかし柳先生は、予定通り京都へゆかれ、有島武郎氏のあとをついで、同志社でホイットマンを講ずることになつた。けれども京都での柳先生の生活は、静かに読書に耽るやうなものではなく、全国を歩くやうな活動的なものに変つた。私は東京にとどまつたが、その仕事の一部を受け持つて殆んど医学を放棄したやうな生活をした。

柳先生の目覚ましい活動は、私を興奮させた。私は家人や先輩や友人から医学を放棄したことを痛罵された。柳先生も親類の人々から冷たい眼を向けられ、世間から誤解をうけた。（323-324頁）

ここでの式場の書きぶりは、無理解な父の反対によって尊敬する人物と地理的・空間的に引き離され、両者は周囲からの誤解や批判という受難に耐えつつ藝術に対する熱い思いを共有しつづけるという、一種〈メロドラマ〉的な師弟愛すら思い起こさせる。実際、柳の没後、式場はこの時期の柳の「内面的生活を知っているのは、兼子夫人と私」と回想している¹⁹。そして、式場は「物心両面の苦しみをときどき私にもらしていらした」とも記し、柳にとって「特別な存在」であつたことを強調する。

しかし、1920年代後半の木喰研究以後、京都に拠点を移した柳の活動を振り返ってみると、式場との断絶が鮮明になるだろう。1926年には「日本民藝美術館設立趣意書」を起草するが、この趣意書に署名した7人の中心メンバーに式場は含まれていない。また、1927年には柳を主導者とした上加茂民藝協団が発足するが、この短命に終わったギルド社会主義の実験にも式場は参加していない。

式場が柳の京都移住に一時は従うつもりであつたのを翻意し、木喰五行研究会からも離脱した理由は何だろうか。式場自身が述懐するように父による反対も多大な影響を与えたことも予測できるが、それに加えて柳が式場に求める物心両面での貢献ないしが負担になった可能性を指摘できるだろう。柳が1925年（大正14年）に刊行した『木喰上人作木彫仏』は、柳自身の装丁による縦51センチ、横53センチの大判コロタイプ（平板製版）による細部にまで手を加えた写真集であつた。しかし、式場によると「その金の支払いができず私の責任にまわされ、何年か月賦で苦しみながら払つたものだ」と

回想している²⁰。

その理由がなんにせよ、一時とはいえ民藝の形成期に運動から距離を置いたことは、式場にとってある種の疚しさとして残り続けた可能性がある。そして、その埋め合わせこそが後の『月刊 民藝』における過剰なまでの民藝に対して式場がコミットメントを示す理由の伏線であったかもしれない。

1.3 精神医学研究と欧州視察（1925年～1929年）

1925年（大正14年）に木喰研究を離れた式場は東京にとどまったのではなく、9月に帰省して実家に近い中蒲原郡金津村（現・新潟市秋葉区）に医院を開く。その後、翌年には精神医学研究に専念することを決めて、母校新潟医科大学（新潟医専から1922年に昇格）に戻るが、「私は医者にはなつたが、文学をやるのか医者をやり通すのかと危ぶまれてゐた時代があった」と記しているように、葛藤はあったようだ²¹。指導教官の中村隆治から自由な研究や芸術活動を許された式場は、同人誌『藝術時代』を創刊し、昭和2年（1927年）まで刊行するなど文化活動も行っていたが、ここから数年間は学位修得の準備のための医学研究に取り組み、昭和3年（1928年）に学位論文「新潟市小学児童の知能基準ならびに劣等児の精神病学的研究」を完成させている。

翌1929年（昭和4年）には、式場は学位論文の完成に必要なと言う名目で欧州各国を旅行する（なお実際のところ学位論文は既に完成していた）。数年来精神医学研究に傾倒していた式場を民藝や藝術に傾かせる契機となった。とりわけ、式場にとって重要だったのは、7月にロンドンに到着して以降、同地で柳宗悦と濱田庄司に同行し、各地の美術や民藝を調査した経験であった。8月にはベルリンを訪問し、現地滞在中に学位論文認定の電報を受ける²²。その後、一行はスウェーデンを訪問し、9月10日から3日間ストックホルムのスカンセン民族博物館に通い詰め、その展示内容および展示方法に感銘を受けたといわれている。そして、当地の民族博物館の訪問を受けて、柳宗悦は心に温めていた日本民藝館の設立の意志を固めた。ここで注目したいのは、式場がストックホルムにおける柳の日本民藝館の設立の決意を共有し、投影性同一視のように自らの決意として感じていることである。式場の自筆年譜では「特にスウェーデンのスカンセン民族博物館をみて、日本民藝館の設立を決意」とあたかも式場自身が決意したかのように断言している。『式場隆三郎「脳室反射鏡」展 図録』に再録された年譜においても、この一文に補注がなされ、「原文ママ」と記されているが、日本民

藝館の設立は柳宗悦のみならず、式場にとっての「決意」でもあった（250頁）。この点においても、式場が自身と柳との「異体同心」を強調する精神的な近さを強調する観点、あるいは同一化への願望が見受けられるだろう。

1.4 ゴッホ研究の本格化とジャーナリズムへのデビュー（1930年～1934年）

式場の欧州旅行の成果のひとつは、オランダ、フランスにおけるゴッホの文献や資料の調査・収集であった。式場はこれらの成果をもとにライフワークともいべきゴッホ研究を行っていくことになる²³。一方では、精神科医としては1930年（昭和5年）に新潟医大に戻るが、その春に山梨脳病院（現・特定医療法人山角会山角病院）に就職するも辞任し、静岡県大宮病院に院長に就く。さらに、翌春には静岡脳病院に就任するなど、式場は慌ただしい時期を過ごす一方で、雑誌『アトリエ』に連載したゴッホの評伝や論文をはじめとする執筆をつづけていた。

1932年（昭和7年）には、それまでの研究の集大成として、柳宗悦の題字、芹沢銈介による装丁の大著『ファン・ホッホの生涯と精神病』（5月上巻・12月下巻）を聚楽社から刊行する。この著作に式場は自信と思い入れがあったらしく、自筆年譜では「この本はやがて欧米にも認められ、いまや各国の研究書に記録されるにいたつた」と記している。また、後に自身が執筆した「民藝に関する著作」という紹介文の中に「内容はともかく」と断りを入れつつも同書を加えている（『月刊 民藝』第1巻第6号）。

式場の『ファン・ホッホの生涯と精神病』の内容の評価やゴッホ受容史における位置づけを考察することは本稿の目的から逸脱するため、別の機会に譲らなくてはならないが、柳宗悦との関連において注目すべき点は、その著作の装丁と下巻のゴッホ研究の書誌情報である。おそらく、式場は、柳の出発点というべき著作『キリアム・ブレイク』や、柳が装丁した壽岳文章の『キルヤム・ブレイク書誌』の工藝的装丁やそれらに掲載された書誌情報を緻密に網羅するスタイルを踏襲したものだろう²⁴。式場にとって装丁の美しさという芸術的価値と、研究内容の水準の高さという学術的価値の両立した書物を生み出すことこそ目指すべき理想であり、生涯の目的でありえた。

しかし、自筆年譜によると「ゴッホ研究の大著で認められ」た式場は、この時期を分岐点としてジャーナリズムの世界に足を踏み入れ、数多くの通俗的な読み物や記事を量産してい

くことになる。そして、そこに共通するのは、一般読者の興味関心を喚起する性や恋愛、結婚などのテーマを精神科医としての立場から説き聞かせるという啓蒙的姿勢である²⁵。

民藝や美術に心惹かれる側面の一方で、医学的知識を応用したジャーナリズムに代表される通俗的・大衆的なものにも積極的に関与する側面を見せる式場の矛盾あるいは断絶をどのように評価すべきなのだろうか。それを式場の「俗物性」（春日武彦）や「隠された事業意欲」（木下長宏）という個人的なパーソナリティに還元することは容易である。だが、式場の生涯を振り返ってみるならば、〈芸術と医学〉、あるいは〈知識人と大衆〉という矛盾ないし二項対立のはらむ緊張関係こそ式場を突き動かす原動力になったのではないだろうか。とはいえ、式場の文章を読む限り、この矛盾が生み出す緊張関係に対して式場が葛藤する姿勢はほとんど見受けられない。すなわち、そのような葛藤は、すでに乗り越えられ、終わった自伝的エピソードとしての追憶として語られるにすぎない。そして、式場に内在する矛盾の緊張関係は、彼自身が無自覚なままに（式場の言葉を借りれば）〈ノーマルとアブノーマル〉²⁶、〈理性と狂気〉、〈健康と病い〉、さらに戦時中は〈日本と満州〉として拡大され、再生産されていくことになる²⁷。

2. 科学啓蒙活動とナショナリズム (1935-1939)

1930年代半ばからの式場の活動は、それまでの民藝やゴッホなど狭義の藝術研究から社会問題へと急激に拡大していくことになる。そして、その活動には、山下清の「発見」²⁸、ハンセン病の作家・北条民雄への支援²⁹、精神疾患を患った地主が手掛けた奇妙な建築の記録『二笑亭奇譚』の執筆³⁰など多岐にわたる。そのすべてを詳述することは別稿に譲らなくてはならない。だが、本稿では、式場がこの時期に優生学や断種法の思想の影響を受けて「民族」などのナショナリスティックな発言を行うことに着目し、社会活動と民藝運動との間の連続性を指摘したい。

式場の優生学支持の背景には、1935年（昭和10年）に、「科学ペンクラブ」の活動を通じて知り合った太田武夫（典礼）との交流が挙げられるだろう。太田は産児制限や避妊の大衆啓蒙活動を含む「性科学」の論客として活躍していたが、そのような太田との交流を通じて式場はそれまで明確に示していなかった優勢思想に基づいた断種法を積極的に支持する姿

勢を示すことになる³¹。このように述べる根拠として1926年（大正15年）に式場が精神疾患について一般大衆向けに発表した最初の出版物である講演パンフレット『精神病者の問題』が挙げられる。同書において式場は、遺伝と精神疾患の関係を取り上げ、アメリカの断種法の状況を紹介しているが、自らは必ずしも賛成しているわけではない³²。しかし、1936年の『毛髪と寿命』（南光社）に収録された「断種法の行方」と題したエッセイでは、精神疾患と遺伝の関係に対する科学的エビデンスの欠如から断種に対して一定の留保を示しつつも、精神疾患に対する手段としての有効性は認める立場へと変化する。

断種法が今日ほど問題にされなかつた時代には、医学者は皆賛成で、世間が人情主義から反対してゐるやうに見られてゐた。しかるに現在の情勢は一変した。民族の向上、正常化を希ふ意識の強化は、一般人に優生学の必要を感じしめ、断種はその実行方法として最も有力なものと思はしめるに至つた（68頁）。

また、前述の「唯物論全書」に含まれる『精神病理学』においては、「断種法への私見」として「断種は正しい調査、正しい診断によつて行ふときは、有効な処置である」として肯定的に述べられる（129頁）。

式場の優生学や断種法に対する見解を評価するためには、同時代の医学者の見解や思想状況との比較検討が不可欠であるため、早急な結論を下すことは避けなければならない³³。また、本稿で式場の断種法についての見解を今日の観点から批判したいわけでない。式場と柳との関係を考察することが目的であるはずの本稿において、この問題を論じる理由は、優生学や断種法を論じるに至った1930年代後半以降の式場が急速にナショナリスティックな発言を行う点を指摘するためである。前述の「断種法の行方」では次のように述べられる。

〔断種法の〕賛成者の中には、諸外国の例をひいて、日本だけ実行できない訳がないといふ人がある。これは驚くべき暴言で、日本民族の侮辱であらう。日本は欧米や支那などとはまるで違つた国であることを忘れてはならない。断種法は外国のものを参考にするのはよいが、あくまで日本民族の現在と将来を十分に考慮に入れてかゝらねばならぬ。（69頁）

それ以前の式場は、「日本」や「民族」、「伝統」などという

言葉が示す表象を「欧米や「支那」という〈外部〉との比較において積極的に語る姿勢をほとんど示さなかったのに対し、優生学や断種法などを論じる際には積極的に言及することになる。

そして、その変化は、1939年以降の『月刊 民藝』における式場の一連の発言とも共通することが指摘できる。すなわち、医学者として優生学や断種法を論じる側面と、民藝運動の中心者としての側面は、式場のナショナルリズムの延長線上にあると解釈しうる。換言すれば、式場自身の中では、「断絶」は存在せず、〈芸術と医学〉が両立しえたのであろう。だが、式場のナショナルリズムは、民藝運動のみならず柳にすらも少なからぬ影響を与えることになる。

3. 民藝運動と『月刊 民藝』

式場のナショナルリズムが柳に影響を与えたと主張にすることは、従来の研究においては暴論として捉えられるかもしれない。確かに、通説では柳は「平和主義者」としてみなされてきた³⁴。だが、この通説には本稿の冒頭で言及した小熊英二や長田謙一、菊池裕子などによって提起された異論が存在することも事実である。とりわけ、柳と式場との関係を考慮するならば、柳の思想に含まれる「平和主義者」としての信念と潜在的なナショナルリズムに接近する要素が極めて危ういバランスの下に成立していたことが指摘できるだろう。とりわけ、式場が編集として深くかかわる『月刊 民藝』は、北支に出征していた吉田璋也の現地における民藝運動の報告や式場が主導する満州における計画が展開される舞台として、激しいナショナルリズムによって彩られることになる。そして、同誌における柳の言説を辿ると、決して式場や吉田と距離を置いていたわけではなく、むしろある種の共感すら示していることがわかる。以下では、『月刊 民藝』における式場と柳の言説を中心に、戦前・戦中の民藝運動の展開を辿りたい。

1939年（昭和14年）4月に式場は『月刊 民藝』の編集に携わり、民藝運動の主要同人としての活動を再開することになる³⁵。その背景には、式場と新潟医専の同級で医師・吉田璋也との関係³⁶が重要な契機となった。鳥取県出身の吉田と式場は、アダム社の時期からの盟友と呼ぶべき関係であるが、吉田も民藝運動に深くかかわり、とりわけ新作を生み出す「新民藝」に取り組んでいただけでなく、地方の民藝を振興し、普及するための店として東京銀座に設けられた「たくみ」工芸店に流通させる民藝品を仕入れる役割を担っていた³⁷。しかし、1938年（昭和13年）に軍医として北支に出

征することになった吉田は、式場に「たくみ」の支援を託したという³⁸。これを機にして、式場は民藝運動の中心的な役割を担っていくことになる。

『月刊 民藝』第1号に掲載された式場の「月刊民藝の由来」によると、1月30日の夜、柳の琉球旅行の土産話を聞くために企画された席上において、同誌の創刊が提起されて即時決定したという³⁹。しかし、民藝協会の雑誌としては柳宗悦が中心となって編集がなされていた『工藝』が存在したにもかかわらず、『月刊 民藝』が創刊された理由はなんであろうか。式場によると、「工藝」はあくまでも良心的な編輯によって継続されるが、「民藝」は敏活を主とする軽機関銃のやうな役目をする」と述べられる。ここで、否応なく目を引くのは「軽機関銃」という表現だろう。式場自身にとって、「機関銃」は「機関誌」とかけた単なる言葉遊びだったのかもしれない。しかし、式場は出征して北支で活動する「同志」吉田璋也の勧めを受けて決心がついたと記していることからもうかがえるように、『月刊 民藝』はその創刊時点で日中戦争下の緊迫した社会情勢を反映した不穏な空気を伝えている。

式場の記事が掲載された紙面の二段組みの上段には柳の「なぜ琉球に同人一同で出かけるか」という記事が掲載されている。尾久彰三が認める通り、『月刊 民藝』の刊行の要因は民藝協会の沖縄視察とかかわっており⁴⁰、その活動の報告および広報という性格を担っている。従来でも、いわゆる「沖縄方言論争⁴¹」を含む柳の琉球とのかかわりについても、これまで多くの議論がなされてきたが⁴²、式場と民藝運動との関連で付言するならば、1941年（昭和16年）9月には式場の編集によって榕樹社から『琉球の文化』が刊行されている。この式場と柳との共同作成とも呼ぶべき著作において式場は方言問題について「勝敗は既についた」と宣言するが、それに引き続いて、「地方文化興隆の声が新体制運動とともに起こつたのは、これらの方言問題やわれわれの民藝運動も一つの誘因をなしたと信ずる」と述べる（45頁）。

ここでの「新体制運動」とは、1940年（昭和15年）の第2次近衛内閣の外交政策に端を発した文化・政治運動であるが、民藝協会はいち早く『月刊 民藝』10月号⁴³において「民藝と新体制」を特集する⁴⁴。同号では、まず「新体制の手工藝文化組織に対する提案」がなされ、地方工芸振興協会の提唱と日本民藝協会の強化が主張される。この「提案」は日本民藝協会名で発表されているが、吉田璋也に言及されていることを踏まえると式場の意向がかなり強く反映されていることが予想される。

なほ、本協会同人の一人吉田璋也のごときは、現在北支

派遣軍にあつて、特務機関の一員となり、支那民藝の調査と制作指導に従事しつゝある。本協会の結成が実現すれば⁴⁵、わが国のみならず、支那、満州、南洋方面までもその仕事を発展せしめ、輸出工藝にも強大なる力を加へることが可能だと信ずるのである。(3頁)

そして、同号には「提案」に続いて、地方工藝振興機関の協議会の会談記録が掲載されている⁴⁶。ここで柳は民藝協会の代表として「もつとも民族的にして健康な美といふものを示したものが一番工藝として本髄であるという結論に到達致した」と述べ(10頁)、「新体制の政府となつて参つた時期に特に日本的なもの、又健康的なものを發揮させるといふことは、この新体制に即応する最も私は重要な道ではないかと思ふ」と発言する(11-12頁、強調引用者)。ここで、柳は「健康な美」を民族や国家と即応させて議論の行っていることは注目に値するだろう。

式場もまた同協議会において民藝運動は古い技術の保存や復活を目的とするのではなく、「もつと進んで新しい日本のために役立つといふことが、われわれの最も大きい念願」と述べる(25頁)。

柳は同号に「新体制と工藝美の問題」という論文を掲載し、「国家が要求する新しき制度は、民藝の理想を實際化する上に、絶好の機会として恵まれたやうに思へる」と述べる(29頁)。そして、同論文は以下のように国家と美と民藝を称えて結ばれる。

今や国家を挙げて正しき美、健全なる美、質実なる美を顕揚すべき時期は到来した。この機会を失しては千年の悔みを残すであろう。凡ての作家も工人も志を集めて力を合わせて、「こゝに日本の美がある」と云うことを世界に示さうではないか。(44頁)

続く式場の「新体制と民藝運動」は、柳の論点を敷衍し、現在の工藝が実用性から離れてしまったことを批判する。そして、式場は次のように述べる。

更に大きな誤謬は、欧米の浅薄な模倣に溺れ民族性を忘れたことにある。今日展覧会の工藝品の大部分を占めるのは、日本的でない、しかも純欧風でもない、奇怪な混血児である。新体制は日本民族性の発現に力を致すべきである。従つて在来の奇形な工藝を揚棄し、純粹な日本の形態と精神に貫かれたものであらしめたい。(46頁)

式場は、欧米の「模倣」が文化をゆがめると指摘し、新体制は模倣から脱却した工藝を建設せよと主張する。そして、同論文は、「民族的」であることが「健康」であることと同義であるとの理解から、これ以外に時勢に即応する工藝はありえないと結ばれる。

『月刊 民藝』の「民藝と新体制」特集が刊行された同月13日、柳と式場は河井寛次郎と濱田庄司と共に、吉田璋也の招きで北京に赴く。同月18日から20日にわたって、吉田の指導の下で開催された「石門地区厚生産業展覧会」および「北京新作民藝展」を視察する⁴⁷。吉田の北支における活動に呼応するように、式場は満州における民藝運動を推進していくことになる。1943年(昭和18年)7月、日本民藝協会は、満州軽工業団に依頼され、とりわけ若素製薬から出資を受けて、「満州民藝協会並民藝館設立事業第一期計画案」を作成する。この事業計画は、式場が『民藝』に長期連載⁴⁸することになる「満州記」の第1回に掲載されている。

予て満州国の文化建設に関心を有する若素製薬株式会社と日本民藝協会とは、今回協同して各関係官庁並びに国体の後援を希ひ、満州国文化高揚運動の一環として民藝運動を展開し、国民生活用具の優れた伝統保存と想像的育成に勉むると共に開拓民の衣食住用具の自給体制を確立せしむべく、之が指導を為し以て生活に即せる文化の建設に資せんとす。(2頁)

同年8月は式場が中心になり、濱田庄司、外村吉之助らと満州へと渡り、現地の吉田らと各地民藝の調査蒐集に着手する⁴⁹。9月には新京で「満州民藝展」を開催、同月26日に帰国した。式場の満州での調査の記録は前述の「満州記」において詳細に述べられている。この内容については別稿において検討したいが、式場が満州へと注いだ熱量はただならぬものであったことは特筆に値するだろう。ここでは、1944年(昭和19年)12月の『民藝』第68巻(第6号第12号)に掲載された「満州記」最終回の結びをみてみよう。

私たちは貧しいと想はれてゐる満州の民藝が、決して失望すべきものでなく、まだ種子も根も幹もあることを知つた。それを守ることが急務であるが、一方、それらをいかす新作運動が必要だと思ふ。開拓民、在満一般の日本人のために、生活に必要な民藝品を備へることは決して不可能ではない。私たちはその一部として、満州陶

磁で千数百個の試作をした。情勢は刻々に変化し、物資の不自由は各方面に起こりつつある。しかし、それも内地に比べればまだ希望がもてる。私たちは第二期の仕事を計画して今年それに着手しようとした。それはいろいろな事情に拒まれてまだ実現にはいたっていないが、希望はすてない。来年は必ず何とか具体的仕事を始めたいと念じてゐる。

民藝が苛烈な戦時生活にこそ生かされねばならぬことは、内地での経験が明らかに証明してゐる。満州における民藝は、多様な民族のあるだけに、一層興味があり、やり甲斐もある。私たちはここに大きな希望をのべたり、議論を展開するより、実際に仕事をしてみたい。機は熟してくると確信する。私の満州記は心ある同志を一人でも多く得るための素描であつた。この次に書かれる満州記こそ、私たちの実践記となろう。(38-39頁)

式場にとっての満州とは、吉田璋也の北支における民藝運動を参考にした(1)民藝品および工芸技術の保存、(2)新作民藝の指導・制作という側面をもつ。しかし、それだけではなく、式場はジャーナリズムの寵児としてのコネクションを最大限に活用し、(3)新体制運動という時勢に即応した公官庁と産業の共同プロジェクトとしての民藝運動の拡大を実務家としても支えていくことになる。ここに、式場の高揚したナショナリズムを見出すことは容易いだろう。同様の式場の立場は同号「編集後記」においても示されている。

この緊迫した決戦下にあつて技術をもつ人々は、進んでそれを国家に捧ぐべきである。もう単なる職域奉公などいつてゐるときではない。民藝協会は率先して日本固有の技能を戦力に応用できる方策を講じたいと念じてゐる。多方面の達人を網羅した新組織をつくり、それが直ちに兵器の生産に役立つやうな体制におきたい。芸能人が在来の形での奉公ではなく、新しい活動に入りこの大戦争を勝ち抜く決意を示すべきときが来た。(40頁)

しかし、式場の期待した満州における民藝運動の第2期事業は実現することなく、日本は敗戦を迎える。戦後、『民藝』は1946年(昭和21年)7月の第70号をもって復刊されるが⁵⁰、同号には柳の「民藝の強み」が掲載される。この論文は、民藝運動が「宗教運動」に近く、「造形美論の形はとるが、一種の精神運動である」と述べられるように、『美の法門』や『南無阿弥陀仏』に代表される戦後の柳の宗教思想あ

るいは「仏教美学」の先駆けとなる重要な着想が含まれている。そして、同論文では民藝の原理が「不動の真理」に支えられ、「永遠の今」にあるという超-時代性が強調され、「民藝美論が標榜する「健康の美」は、時代を貫いて不変である」と主張されるに至る(3頁)。しかし、ここで注目に値するのは、戦前・戦時中における「健康の美」が民族や国家と結びついていたのに対し、ここでの「健康の美」は宗教的・精神性と結びつけられており、異なる位相から論じられている点である。柳の同論文において、戦時中の民藝協会の具体的な活動や新体制運動への関与などは触れられることはない。しかし、民藝の「健康の美」が時代を貫いて不変であるという柳の主張は、式場を中心とした日本民藝協会の戦時中の活動を考慮するならば、時局に流されたのではないというある種の自己弁護を読み取ることもできるのではないだろうか。

これに対して、式場は同号において「日本再建と民藝」という文章を掲載する。式場は冒頭において「戦時中の民藝はどうであつただろうか」と問いかけ、「新体制運動が起つたときには、一応これはとりあげられた」が、「推進されなかった」と関与を矮小化する(4頁)。その一方で、戦後の日本復興には手工業に基づいた民藝が必要であると述べる。

日本を民藝の最も栄える国にするには、今こそ絶好の機会なのである。倫理の荒廃が叫ばれてゐる現在、民藝は生活の倫理の実践道であることを悟るべきである。志を同うする人々とともに、この仕事に精進したい。(21頁)

ここには、新体制運動や満州への関与は伏せられ、「平和に民主主義国家として再出発」した日本の精神的支柱としての再建への貢献が期待されている。そして、式場は民藝運動の周知が足りず、「占領軍の人々に対しては、まだ耳新しいことで、十分に説明する必要がある」と宣伝広報活動の必要性を論じ続ける(5頁)。

しかし、式場が民藝運動の機関誌を自負していた『民藝』は、1948年(昭和23年)第70号をもってその後は刊行が途絶する。その理由は、式場が印刷用紙の配給権の手違いから『民藝』を発行する権利を失ってしまったことに起因する⁵¹。柳は同年の2月1日付の河井寛次郎宛書簡(2357)と外村吉之助宛書簡(2358)において、式場が『民藝』の権利を自身が社長を務める昭和書房から刊行されている雑誌『文藝読物』に譲り渡してしまったと報告する。柳の書きぶりはまさしく激昂に近く、「詐欺行為」「裏切り」「憤慨」と激しい言葉が連なる(『柳宗悦全集第21巻・中』515-516頁)。式場は

事実上、柳から「破門」され、民藝協会理事を辞任し、民藝運動の中心から去ることになった⁵²。

結びに—— 式場隆三郎と柳宗悦との影響関係

1948年(昭和23年)の「破門」は決定的な断絶ではなく、式場は柳との関係を改善することに成功した⁵³。しかし、式場はかつてのように民藝運動に身を置くことなく、戦後はゴッホ展の企画、山下清のプロデュースなどの美術の世界とジャーナリズムの世界を縦横無尽に行き来し、社会的名声を高めていく。それに対し、柳は宗教的思想を深化させ、独自の「仏教美学」を展開していくことになる。

本稿の結びとして改めて柳と式場との影響関係を検討しよう。木下長宏は「式場の書くものに柳の思想的影響は顕著に読みとれるが、柳の書物に式場の思想的な影はない」と述べる⁵⁴。しかし、『月刊 民藝』を中心とした戦前・戦時下の民藝運動の活動を振り返ると、柳が式場の活動に影響を受け、「引っ張られた」可能性は十分に考慮すべきではないだろうか。とりわけ、「健康と病的」という形容は、戦前より柳と式場が民藝美の表現する際に一貫して用い続けていた。だが、その形容はナショナリズムの高揚とともに民族や国家と結びつき、健康な文化の実現という社会運動へと変貌していた。

だが、柳の「健康」概念の系譜を辿ると、式場との木喰研究に行きつくことになる。その共同作業のなかで見出された木喰五行上人の「健康性」が民藝美のひとつの原型になった。そして、本稿において確認してきたように、民藝における「健康」が「民族」と結びつき、戦前・戦時下における民藝運動が新体制に即応し、北支・満州への拡大を計画するに至ることを踏まえると、柳と式場との関係は抜き差しならぬものとなるだろう。式場は、自らのオリジナルな思想を展開することよりも、影響を受けた思想を「複製」し、社会の中で拡散するプロデューサーないしオーガナイザー的能力に秀でていた。だが、その「複製」はさらなる「複製」を生み出し、影響を与えた柳も予想しなかった展開すら生み出すことになったのだ。

柳と式場との関係は、惑星と衛星とのそれに比することができるかもしれない。式場の生涯にわたる執筆活動と社会運動は、その最初の出発点であった柳の重力圏から抜け出すことはできず、周回しつづけることになる。しかし、柳もまた式場のジャーナリズムに対する影響力を利用し、民藝運動の

拡大を図ったことは十分にあり得るだろう。式場を忘却することは、思想史における天体図を描き出すうえで決定的な見落としを犯すことになるのだ。

注

- 1 小熊英二『〈日本人〉の境界——沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮：植民地支配から復帰運動まで』(新曜社、1998年)、長田謙一(1998)「『新日本美』の創生——戦時下日本における民藝運動」(『批評空間』第2期第19号、190-203頁)、Yuko Kikuchi, *Japanese Modernisation and Mingei Theory: Cultural Nationalism and Oriental Orientalism*. London and New York: Routledge Curzon, 2004.
- 2 Kim Brandt, *Kingdom of Beauty: Mingei and the Politics of Folk Art in Imperial Japan*, Durham and London: Duke University Press, 2007.
- 3 その他先行研究も式場と戦時下の民藝運動の関係について部分的に触れるものは存在するが、主題的に論じるものは少ない。そのなかでも、柳宗悦の「沖縄方言論争」に対するポストコロニアル理論による民藝批判とその影響を受けた竹中均や金谷美和の研究は、戦時下の民藝運動について資料をもとに描き出す点において重要である(竹中均『柳宗悦・民藝・社会理論——カルチュラル・スタディーズの試み』(明石出版、1999年)、金谷美和(2000)「民衆の工芸」という他者表象——植民地状況下の中国北部における日本民芸運動」(『民族学研究』第64巻4号、403-424頁)。とりわけ、竹中は第6章「試金石としての「満州」——民藝運動の社会認識の臨界点」において、式場に言及し、「特異児童」とみなされた山下清に対する精神科医としてのまなざしと、民藝運動の中心者としての満州への態度が軌を一にするものであると論じる(156-160頁)。竹中の論点は、式場の思想を論じる上で不可欠であると思われるが、本稿では紙幅の都合上、山下清との関係については割愛しなければならないため、稿を改めて検討したい。
- 4 生前の式場が世間からいかに評価されていたのかという一例としては、1961年には日本書房から発刊されていた『現代知性全集』なるシリーズの1巻として、鈴木大拙や和辻哲郎、小林秀雄など錚々たる顔ぶれに並んで式場の著作集が編纂されていることから推察できる。同書は、

2010年には『日本人の知性 17 式場隆三郎』として学術出版会から再刊された。

- 5 1992年にロサンジェルスで開催され、翌1993年に世田谷美術館で開催された「パラレルヴィジョン展」では、日本におけるアウトサイダー・アートの先駆として式場が言及された(塩田純一「異界の人——日本のアウトサイダー・アート」『パラレルヴィジョン——日本のアウトサイダー・アート』世田谷美術館、12頁)。また、式場とアウトサイダー・アートとの関係に対する批判的紹介は、服部正『アウトサイダー・アート——現代美術が忘れた「芸術」』(光文社新書、2003年)を参照。式場が山下清をいかにプロデュースしたのかという経緯については、服部正・藤原貞郎『山下清と昭和の美術——「裸の大将」の神話を越えて』(名古屋大学出版会、2014年)が詳述している。
- 6 近年でも精神科医の春日武彦は『私家版・精神医学事典』(河出書房新社、2017年)において式場の項目を設けて、その活動を貫くパーソナリティを「俗物性」と評して切っ捨て捨てる(445-446頁)。
その一方で近年、式場隆三郎の業績の再評価の試みがなされている。2015年には式場の没後50周年を企画して、市川市文学ミュージアムにおいて「炎の人 式場隆三郎——医学と芸術のはざままで」展が開催された。また、2020年に新潟市美術館・広島市現代美術館・練馬区立美術館において開催された企画展「式場隆三郎——脳室反射鏡」では、式場の生涯にわたる膨大な量の活動の全体像を描き出そうとする意欲的な展示がなされた。とりわけ、その図録には、約350点以上の図版と約75,000字の解説、ならびに5編の論考と詳細な年譜・著作目録・関連記事一覧が収録され、式場隆三郎を研究する上で欠かすことができない記念碑的業績として高く評価しうる(藤井素彦・山田真理子・喜寿考臣ほか(2021)『式場隆三郎 [脳室反射鏡] 展 図録』新潟市美術館)。
- 7 以下の記述は、『現代知性全集(49) 式場隆三郎』に収録された自筆年譜およびそれを次弟俊三が補訂した「式場隆三郎年譜」(『式場隆三郎めぐりあい(人や物や)』(私家版1977年収録)、藤井・山田・喜寿ほか(2021)に多くを負う。なお、式場の生涯にわたる評伝は、木下(2002)「式場隆三郎——美に魅せられた医家」『近代画説11——

特集・美術批評家列伝』29-40頁がほぼ唯一の文献である。

- 8 弟俊三によると、式場が医学を志した理由は、村松中学校在学中に養子と医業を受け継ぐことを条件に学費を保証されたことによる。以後、隆三郎は1921年(大正10年)まで、「柿沼」姓を用いている。
- 9 アダム社の活動については、藤井素彦「式場隆三郎と白樺派」、藤井・山田・喜寿ほか(2021)、170-189頁を参照。
- 10 「『白樺』・木喰・民藝」、67頁。初出『美術手帳』1961年7月、引用は蝦名則編『回想の柳宗悦』(八潮書房、1979年)に収録された際の頁数による。
- 11 なお、式場によると『宿命の藝術』におけるブレイクの挿絵は、ブレイク研究者としても知られていたローレンス・ビニヨン(Laurence Binyon, 1869-1943)の著作の限定特別出版からの複製だという。
- 12 佐藤光「柳宗悦とウィリアム・ブレイク——環流する「肯定の思想」」(東京大学出版会、2015年)
- 13 しかし、柳のブレイク解釈と式場のそれの間には相違ないズレが存在することは注目に値するだろう。柳はブレイクの「無律法主義」や「天国と地獄の結婚」にみられる、二項対立を相互依存関係にあると見做し、その両者を共に肯定する思想に着目し、「理性と狂気」とは対立しないとみなしていた。しかし、式場は『宿命の絵画』に収録された1938年の「狂人の絵」というエッセイにおいて、理性と狂気「健康と病的」という二項対立を前提としていることが指摘できる。柳のブレイク解釈が式場にどのような影響を与えたのかはより詳細な検討が必要である。
- 14 木下長宏『思想史としてのゴッホ——複製受容と想像力』(學藝書林、1992年)。同書において、『白樺』によって構築された像を一層強化し、明確にするために「ゴッホを研究したが、「結局、式場は「伝記作者」の域を出なかった」と評される(168頁)。
- 15 キム・ブランツ(上田美和訳)「民藝の発見——一九二〇年代の階層と趣味」バーバラ・佐藤編『日常生活の誕生

——戦間期日本の文化変容』柏書房、2007年。

- 16 式場は1921年（大正10年）に新潟医専を卒業し、精神科医としてのキャリアを歩みだすが、文学の道をあきらめきれず、翌年には上京して大井町倉田に神経科医院を開業する。1923年（大正12年）には関東大震災の被害を受けるが、このごろから柳とさらに親しい関係を結び、当時柳が設立のために奔走していた朝鮮民族美術館の計画に参加し、資金獲得のための柳兼子の音楽会開催などに協力した。
- 17 木喰五行研究会の会誌『木喰上人の研究』は1925年（大正14年）3月から創刊され、式場は同年8月刊行の通巻第4号まで編集を手掛けたあとに離脱することになる。
- 18 『木喰五行上人畧伝』（『柳宗悦全集』7巻）、251-252頁。
- 19 「『白樺』・木喰・民芸」『回想の柳宗悦』67頁。
- 20 前掲書。さらに、藤井・山田・喜寿ほか（2021）では、「時に宗悦が見せる弱さにほだされた面もあったものか」と式場の内面を推測するが（126頁）、知的エリート男性たちを同人とする白樺派や民藝運動のホモソーシャル的性格を考慮すると、実にありそうである。
- 21 「私の使命」『式場隆三郎めぐりあい——人とももの』3頁。
- 22 同年11月5日に医学博士号授与された。
- 23 式場のゴッホ研究一覧については、木下（2002）の註7において列挙されている（38-40頁）。
- 24 後者の著作は前述の「民藝に関する著作」の一冊として取り上げられ、「内容は世界的〔ママ〕名著」「永く後世に残る大著」と絶賛されている。また、式場は壽岳に対して「私がファン・ホッホ書誌を編み得たのは実に同兄のおかげである。あの歴然たる『キルヤム・ブレイク書誌』は何時も私の机上にあつて、如何に私を刺激して呉れたか」と記している（『ファン・ホッホの生涯と精神病』自序）。
- 25 式場が総合誌に執筆した初めての文章は、1933年（昭和8年）5月の『中央公論』に掲載された「ファン・ホッホの偽作事件」である。そして、同誌10月には式場の初の大衆向け記事「イット解剖学」が掲載された。当時中央公論社編集部に所属していた中村恵は、「イット解剖学」が同社社長の嶋中雄作に高く評価されたと追悼文において記している（「式場博士と中間読物（式場博士とジャーナリズムへのスタート）」『式場隆三郎 めぐりあい（人や物や）』収録28頁）。なお「イット解剖学」を依頼し、式場をジャーナリズムの世界へ誘ったのも自身であると中村は述べている。
- 26 大内は、式場の「ノーマルとアブノーマル」という用語に、社会的な「インサイドとアウトサイド」という問題意識が重なるだけではなく、式場にとっての「アブノーマル」という存在は、現実「社会」との「不適合」という問題を抱える主体の人間であるという指摘する（大内郁（2010）「式場隆三郎と「病的絵画」の終息についての一考察——一九三〇年代末の「前衛性」回避という問題」『カリスタ』第17号、52-82頁）。
- 27 不思議なことに、柳宗悦にとってあまりにも深刻な問題であった「東洋（日本）と西洋」という対立図式は、式場にとって民藝を語る場合にも、ゴッホなどの西洋美術を語る場合にも持ち出されることはない。それは、式場にとって柳によって乗り越えられた「終わった問題」だったのかもしれない。
- 28 式場と山下の関係については、服部・藤原（2014）を参照。
- 29 式場と北条との関係については、以下の論文を参照されたい。大野ロベルト（2020）「アウトサイダー・アーティストとしての北條民雄——〈異端化〉のまなざし」『日本社会事業大学研究紀要』第66集、31-46頁。
- 30 松岡剛「二笑亭からみる、式場隆三郎の「病的」、「民藝」的なもの」、藤井・山田・喜寿ほか（2021）200-219頁参照。
- 31 式場における障害者の性や結婚観への言及は、障害者研究の先駆者・生瀬克己による研究ノートが存在する（生瀬克己（1991）「精神科医式場隆三郎の障害者観について」『桃山学院大学 国際文化論集』第4巻、53-65頁）。生瀬の研究ノートでは、式場の『結婚の教養』（1941年、昭和

- 書房)のみが取り上げられ、残念ながらその他の著作は検討されていない。とはいえ、式場の障害者観と同時代の言説との比較は有益な示唆を与えてくれる。式場の『結婚の教養』は、読者から送られた身の上相談とそれに対する回答をもとに構成されている。これに対して生瀬は、「式場は、当時としては、かなり啓明的な障害者観を持ち、そうした立場から啓発活動にあたっていたと言っよさそうに思える」と評価している(60頁)。
- 32 『精神病者の問題』学藝講演通信社、4頁。なお、このパンフレットは巻末に質問券が付いており、3銭切手を貼って送ると回答が返送されてくる通信教育の先駆けであった。
- 33 昭和期の優生学をめぐる議論が錯綜するのは、紀平正美に代表される皇国史観を支持する哲学者・思想家進化論および優生学に否定的見解をしめすなど、単純なイデオロギー対立の次元から整理できない関係が複雑な影響を及ぼしていることにある(右田裕規『天皇制と進化論』(2009年、青弓社)およびクリントン・ゴダール(碧海寿広訳)『ダーウィン、仏教、神——近代日本の進化論と宗教』(人文書院、2020年)を参照)。そのため、式場におけるナショナリズムと優生思想との関係についてはさらなる検討が必要である。
- 34 平和主義者としての柳を描き出す研究の一例としては、水尾比呂志『評伝柳宗悦』(筑摩書房、1992年、増補版ちくま学芸文庫、2004年)、中見真理『柳宗悦——時代と思想』(東京大学出版会、2003年)が挙げられる。
- 35 1942年(昭和17年)に『民藝』と改題、1946年(昭和21年)第70号まで刊行される。
- 36 式場は1940年(昭和15年)に吉田の北支での日記をまとめた『有輪担架——民藝の心と眼を持った一軍医の従軍木』(牧野書店)の刊行を手伝い、「吉田兄と私は二十余年来の親友である(中略)ともかくわれわれは学校を出て医者になるまで、日夜生活を共にして芸術に興奮し、希望に燃えていた」と跋文に記している。なお、市川市文学ミュージアムにおける「炎の人 式場隆三郎」展の図録には、式場宛の書簡が収録されている。
- 37 吉田の新作民藝運動については、Kim Brandt (2007) Chap. 3 'New Mingei in the 1930s' および入江繁樹(2011)『〈民藝〉の創造—1930年代における鳥取新民藝の実践をめぐる』『デザイン理論』第57号、29-43頁を参照。
- 38 吉田璋也『「たくみ」と式場君』『民藝手帳——式場隆三郎追悼号』(1966年2月)、21頁。
- 39 『月刊 民藝』第1号には、浅野長量による「民藝協会だより」が掲載されているが、ここで浅野は式場の「月刊民藝の由来」と同じく、1月30日の柳宅での集まりで刊行が決定したと記している。しかし、浅野によると同誌の刊行は「式場さんからの熱心な提案」がなされて決定したという(29頁)。この証言をもとにすると、『月刊 民藝』の刊行は、式場が主導したとみて間違いないだろう。
- 40 尾久彰三「沖縄に関する事」『月刊・民藝』解説・総目次・索引』(不二書房、2008年)、17頁。
- 41 1940年1月、柳宗悦を含む民藝運動関係者と沖縄観光協会との座談会において、柳は標準語推進を掲げる沖縄県に対して「標準語の必要は認めている、しかし方言とって片付けるにはあまりにも意義深い沖縄語を否定する態度には反対である」と発言し、推進派との論争が繰り上げられた。
- 42 柳の琉球に対する態度に帝国主義的視点が含まれるという批判的考察については、小熊(1998)参照。
- 43 同時期には式場が編集を務めた『科学ペン』10月号も「科学と新体制」を取り上げている。
- 44 同号には日本に派遣されていたドイツの外交官デュルクハイム(Karlfried Graf Dürckheim)の「ドイツ手工藝文化組織の現状」という論文が掲載され、ナチスの手工藝保護について説明している(54-60頁)。当時、デュルクハイムは、橋本文夫の翻訳によって多くの著作が出版されていた。
- 45 ここでの「本協会の結成」とは民藝協会ではなく、「提案」において提唱されている「地方手工藝振興協会」であろう。

- 46 この協議会は、民藝協会関係者のみならず、農林省、商工省貿易局、商工省工藝指導所、鉄道省観光局、外務省交際文化振興会、東北六県副業主任官・商工係官、青年団青年学校係官、雪国協会、東北振興会社、三越百貨店の各関係者、計46名が参加した大規模な会合であった。公官庁と産業が共同したまさしく一大プロジェクトであったことがわかる。
- 47 杉山享司「中国・「満州」をめぐる問題」『月刊・民藝』解説・総目次・索引』(不二書房、2008年) 27-32頁参照。
- 48 昭和19年 第6巻第4号～第12号、昭和19年4月～12月。
- 49 外村吉之介の記録は『満州・北京民芸紀行』(花曜社、1983年)として刊行されている。
- 50 1945年(昭和20年)1月刊行予定の第69号は存在が確認されていない。水尾比呂志「総論」『月刊・民藝』解説・総目次・索引』(不二書房、2008年) 13頁参照。
- 51 水尾比呂志「総論」14頁参照。
- 52 式場は新たな機関紙として発行された『日本民藝』に次のような謝罪文を掲載している。「この度は私の手違いのため日本民藝協会機関紙『民藝』の発行を不能としたことを遺憾に思います。ここにその責を負って日本民藝協会理事を辞任し、『民藝』愛読者諸賢並びに日本民藝協会に対して謝意を表明すると同時に、新しく誕生した『日本民藝』の健全な発展を祈ります。昭和二三年五月三十一日 式場隆三郎」(『日本民藝』第1号、1948年10月)
- 53 1953年のバーナード・リーチ来日が復縁の契機となったと藤井・山田・喜寿ほか(2021)は示唆する(126頁)。だが、式場の弟の俊三が設立に関与した雄鶏社から刊行されていた雑誌『日曜日』(1952年1月号)に柳と式場との対談「民俗芸術」(56-65頁)が掲載されていることを考慮すれば、それ以前に復縁は果たされていた可能性がある。
- 54 木下(2002) 33頁。